

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

施設長さんへ

ある講演録から

里見 吉英

機関紙 佑啓 第90号

「契約ですら当事者で解決してくださいます。面倒なことは持ち込んでくれるなどという対応です。先日こんなことがありました。職

日本は長い間障害福祉については、措置という行政権限でやってきました。公的責任が明確であったのは私は賛成でしたが、行政からの処分であるということや、サービスの選択ができない等のマイナス面ばかり強調され、構造改革の波に乗り契約に基づく支援費制度が始まりました。しかし、サービス支給量が増大し、財政破綻をきたしただけでなく、サービス利用において地域や利用者間の格差が歴然とする状態になってしまい、改善策として登場したのが介護保険のシステムです。利用者の負担増など紆余曲折を経て現在に至っているのはご承知のとおりです。措置から契約へ移るとき、国の説明会で聞いてみたのです。「行政としての責任から手を離すのではないかと、それに対してこう返ってきました。『調整・斡旋機能は残します』とところが今どうでしょう。利用者の対応で困り市に相談に行くのださい」面倒なことは持ち込んでくれるなどという対応です。職



袖ヶ浦の事件に端を発し虐待や権利擁護に関する研修が各所で実施されています。私が心配するのは職員モチベーションです。自分自身がどう動いていいかわからなくなり自信を失くしている。私どもの法人のモットーは「明るく、元気に、さわやかに、そして品よく」といつているのですが、昔の施設職員と比較するとどうも元気がない。そしてこの施設長さんも何ごともないことを念じている。人間生きていれば健常でもいろいろなことが起きますよ。我々のように障害を抱えている人たちと一緒にいればなお更です。責任をとる覚悟が必要なのです。利用計画から始まり、個別支援計画、モニタリング、請求など事務量も多くなると、利用者本人への具体的な支援のエネルギーが削がれていないか。そうであれば本末転倒です。こんな状況だからこそ利用者と職員を守る覚悟を見せるのです。

がクロージアップされることとなりました。政策による偏りが出た結果ですが、社会の見方は社会福祉法人の体質とみなしているような報道振ります。今になって社会貢献をしろと、社会貢献を条件に税金を免除にした団体であったはずですがお金の力とは恐ろしい。社会福祉法人への課税や不要論もでてきます。しかし、報酬単価が下がったらどうでしょう。営利目的の企業は撤退するでしょう。社会福祉事業はセイフティネットとしての機能を存続させなければなりません。株式会社にはできないところを我々が担わなければならないのです。



我々の仕事じゃないかと思えます。このような状況のなか、自らが運営する事業のことだけに終始しては全体は見えませんが、ましてや社会なんて到底見えるはずありません。確かに地方では福祉の需給バランスに合っていることもあるでしょう。しかし、潰れる事のない事業に胡座をかいているとみなされるかもしれません。こうした小さな法人が全体に占める割合が高いのも特徴ですから国としても報酬単価の設定は難しいと思います。

私たちは、いつの間にか施設の論理で社会を見てしまうことが多いのです。もつと社会人であるべきです。先に述べた私どもの法人のモットーに『品』という言葉を使っています。品格は人間関係の中に現れます。施設長と職員の間でも、職員に働いて頂く、職員は働かせて頂くという考え方に集約されていると思っています。この謙虚さは利用者との関係も同様だと思うのです。

障害者が生活するところは最高にしたい。そこで働く人間も当然です。ここが難しいのですが、いい施設は大体明るい挨拶をしてくれる。職員の服装が乱れたりしているところは施設も同様です。支援の現場で皆マスタクをしているところがありました。表情を見せながらの支援ができないのです。施設長は自信もなく教育もできない。そうなる組織に対するガバナンスが働かない。施設職員にもいろいろな能力を持った人がいます。この人たちがどう動かすか。体を動かすことが得意な人もいれば、利用者と一緒に過ごすことに長けている人もいます。それぞれに特徴を活かしてコーディネートするのが施設長

の仕事です。ただし職員には言います。「さぼってはいけません」頭がいいから立派という価値観しか持ち得ないとした駄目です。与えられた能力で精一杯やることよく施設に呼ばれて話をして、何かありますかと聞くと自分の施設の悪口を言う人がいます。施設長がそこにいるのに。そもそもアイデンティティが働いていないのです。

「あなたもこの一員です。あなたの責任でもあるのです。普段からしっかりと意見を言ったらどうですか。問題があったら変えていけばいいじゃないですか。組織のせいにしては話になりません。謙虚さはもちろんですが熱意も持ち合わせていなければ働いていてもつまらないじゃないですか」他のせいにするというのは私の口癖です。

社会は我々の考える以上に変化をしています。社会をどう取り込み、そしてどう関わるかを意識しなければだめです。施設が社会の中になくはならないものだと思えることです。流された結果困るのは結局利用者だったと言う事がないようにするのが私たちの使命だと思います。

(佑啓会 理事長)

一歩いっば祭りに

参加して

金子 咲子

十一月一日、この時期には珍しい暖かく優しく降る小雨のなか、小石川福祉作業所の「一歩いっば祭り」が開催されました。

息子が特別支援学校を卒業し、小石川福祉作業所でお世話になりました。今回で三回目の参加になります。毎年一歩祭りでは、文京区長様はじめご来賓の方々や地域の皆様にお越しいただき、物販、模擬店、バザーの他、フレームコや抽選会、コース等のアトラクションを作業所の利用者さんと一緒に楽しんでいます。

最初はどの様な行事がまわったか分からず(ごめんなさい)、ご来場の方々多さと、保護者会の役員さんや先輩のお母様方の動きの早さに圧倒されつつ、カレライスの販売をし、あつという間に終わってしまいました。

二回目、三回目は理解を深めたく、一歩祭り係として参加させていただきました。係は全体を把握し、また模擬店やバザーの担当決めや昼食の手配など当日の細かい仕事があり、不備なく進められるか不安でした。当日は前日に利用者さん達と先生方で綺麗に飾り付けされた会場が、溢れんばかりの賑わいよう、その場に存在していた全員が楽しみ分ち合う一時を過ごすことができました。そこには素朴で温かい空気が広がっていました。

機関紙 佑 啓



息子の抱えている生き難さに気付いた頃は自分の感じる辛さと与

来への不安に囚われていたため、難解な人生を歩まなくてはならぬのは、私ではなく息子である事になかなか気付くことができませんでした。

転勤で引越しが多く、先々で療育のための施設を探し、妹二人を連れて通っていた必死な日々の中、全ても受け入れられていたような安心感を得ることがありました。「大丈夫だよ、ハンディキャップがあっても幸福になる方法はあるよ。」と伝えられたような気がして、思えば息子は今まで一度も私を非難したことがありません。また伝えたい言葉もうまく使えないもどかしさを抱えながらも、飾りのない笑顔に向けてくれる彼に癒されて育てられているのは私の方かもしれません。



一歩祭りに来られた皆様もきっと、どのような形にせよ「素朴で温かい」と感じて下さったと思います。そして様々な彼等との関わりの中で、癒される瞬間があると思います。

一歩祭り係を通して、今までお話しする機会の少なかった先輩お母様方と関わられたのも大きな収穫でした。海千山千を乗り越えられた方々です。明るく大らかで、お話にも味がありました。こうして安心して行事を楽しめるのも行場所長始め、小石川福祉作業所職員皆さんの、日々の行き届いたご指導のおかげと心より感謝申し上げます。来年もお楽しみに・・・

(小石川福祉作業所保護者)

「ロンドン旅行記」前篇

楠元 洋海



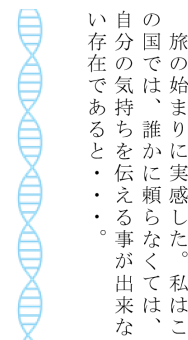
四月一日の辞令交付式で私と本郷主任が突然、名前を呼ばれ、十五年間の永年勤続を表彰された。「海外旅行を楽しんで下さい。」と理事長からの一言。本郷主任とはお互いに相手の存在を意識しながら仕事をしていたこともあり、周囲の先輩方からは、二人旅で仲良くやれるのかと揶揄する一言が飛び。そんな二人を心配してか、里見理事長が旅の引率をして下さる事となった。行き先は、グレートブリテンは、ロンドン。四泊六日間のロンドン三人旅がスタートした。



屋前には羽田空港を無事に飛び立った飛行機は、約十二時間後にロンドンへと到着。現地時刻は午後四時。その頃、日本は深夜の十二時ごろ。国際線の飛行機は、アルコール飲み放題、映画見放題。浮かれすぎて一睡も出来なかったボーとしながら入国審査の順番を待つ。前の人が審査を受けている様子を眺めているとハッ!と気がついた。ツアーでの参加であった為、面倒な手続きは全て添乗員が行ってくれると思っていたが、団体専用の出入口から「こちらへどうぞ。」なんて誘導をされるのは東京駅の新幹線乗り場くらいかもしれない。自分の英語力なんて確かめなく

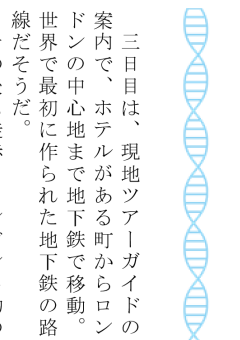
ても分かる。中学一年生の一学期から私の英語力は時を止めている。内心、ドキドキしながらパスポートを出す。チェックを受ける。パスポートを受け取る・・・はずであつたが返してくれない???。何か言い始めた。取りあえず、笑ってみる。さらに何か言っている。事態は悪化。周囲を見渡す。審査を終えた里見理事長を発見。どうしようという目で訴えるが、ここで待っているぞと手を振って来ている。「違うんです」と更に目で訴えるが思いは届かない。不安がピークに達した時、目の前にパスポートが戻される。顔をあげると「もう行つていいよ。」と言っている事が、身振り手振りで分かった。

自分の言葉が通じない世界に足を踏み入れてみて初めて気がついた。自分の思いが伝わらない「あどかしさ」や「不安」そして、「もどかしさ」の感情。しかし、相手が自分の気持ちに気がついてくれた時の「嬉しさ」や「安心」を知ることにも出来た。



旅の始まりに実感した。私はこの国では、誰かに頼らなくては、自分の気持ちを伝える事が出来ない存在である・・・。

まうと心配になったようで、二人のくだらない話を里見理事長が哲學の域に昇華。「人はどのような境遇で生まれるかは選べない不平等がある。しかし、その後の人生をどのように生きるかは平等である。この広大な土地を所有している貴族だけが幸せであつたとは限らない。もしかしたら牧草で働いていた人達の方が、活きいきと生活をしていたかもしれない。」



三日目は、現地ツアーガイドの案内で、ホテルがある町からロンドンの中心地まで地下鉄で移動。世界で最初に作られた地下鉄の路線だそう。

旅を振り返り、思い出す事は、バッキンガム宮殿やビッグベンではなく現地ツアーガイドの案内は素晴らしい事。抜け道や走行するバスの運行経路、時間、地下鉄の路線等の全てがガイドさんの頭の中に記憶されている。更に道路の混雑状況に応じて、地下鉄か路線バスにするか状況に応じた判断も素晴らしい。無駄を感じさせない案内により、十八名の移動困難者は快適にロンドン観光を終える事が出来た。



その時々で最善の方法を示すことが出来る現地ツアーガイドの姿に自分の目標とする支援員像があった。的確な状況判断と場に応じた変化に対応できるだけの力を備えているかを見直そうと決意し、ロンドンのご報告とさせて頂きたい。(次号は本郷主任よりお届け)

編集後記
最近、スポーツ界では若い選手達の活躍をよく目にします。テニスでは錦織圭選手。フィギュアスケートの羽生結弦選手。ボクシングでは井上尚弥選手など、世界と対等に戦うことの出来る選手が続々登場しています。三十代の私も若い世代に負けまいように精進しなければ。来年も『気持ち若く』を目標に頑張ります。

師走の忙しい日々。ほっと一息、佑啓をご笑覧下さい。東京事業所より、九十号をお届けします。ふる里学舎大塚 支援員 池田 茂由